

# 要旨集の書き方&テンプレート

K11001 愛工総和 K11002 愛工今鹿 X11003 愛工姫星 X11004 愛工緑輝  
指導教員 愛工一郎

## 1 はじめに

これは卒業論文・卒業制作要旨集の p<sub>La</sub>T<sub>E</sub>X2e 用テンプレートである。伊藤暢浩先生が作ったテンプレートをベースに、section と subsection のフォントサイズ変更、カラム間のマージン変更などを施している。なお、書式が同じであれば Word や Pages を使っても構わない。

## 2 レジュームの構成について

要旨集 (レジューム) のタイトル (及びサブタイトル) は卒業論文のタイトルと一致してはいくならない。

レジュームの節 (section) 構成は様々なものが考えられ、研究内容や制作内容によっても異なるが、一般的には研究背景、目的および研究概要を記述する「はじめに」で始まる。そして研究全体のまとめ、結論、今後の課題を記述する「まとめ」や「むすび」で締めくくる。全体的には 5~6 個の節で構成され、必要に応じて小節 (subsection) を用いる。

## 3 記述する文章について

研究の内容や記述する文章はオリジナルである必要がある。単に他の研究や実験を流用したり、インターネットや他の文献などの文章をそのままコピーして使用したりすることなどは決してあってはならない。レジュームは大量に印刷されて多くの人が読むため、コピーした文章の使用はすぐに誰かが見つける。

## 4 図や表について

必要に応じて図や表を用いる。使用した図や表についてはキャプションを付けるとともに、必ず本文中で図表番号を参照する。

図や表は自分で作成したものを使用する。標準テストイメージ等を除き、インターネット等で入手した図や写真、表などをそのまま使ってはならない。

レジュームは基本的にモノクロで印刷されるが、必要に応じてカラーの図や画像を用いることができる。またオフセット印刷で製本するため、十分に鮮明な図や画像を用意しておくといよい。

L<sub>A</sub>T<sub>E</sub>X の場合、図のファイルは PDF 形式で用意することが推奨されている [2]。また、EPS 形式を用いることができる。Illustrator などのソフトで作成して、保存するときに L<sub>A</sub>T<sub>E</sub>X で使用可能な画像形式を指定すればよい。PNG 形式や JPEG 形式を用いることもできるが、場合によっては図の外枠を明示的に指定する必要がある。

図 1 は、単独の図である。また図 2 は複数で構成される図である。また figure\* 環境を用いることで 1 カラムの図を使用することも可能である。また、表のサンプルを表 1 に示す。

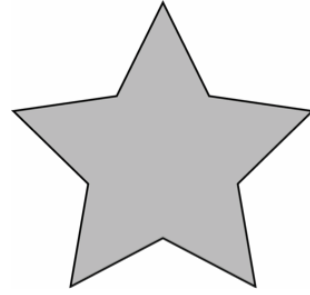
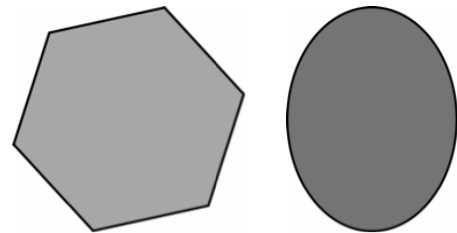


図 1: 普通の図



(a) 多角形

(b) 楕円

図 2: 複数で構成される図

## 5 参考文献について

必要に応じて文末に参考文献を記述する。記述した参考文献は必ず本文中で参照する。参考文献の書き方と本文中での参照方法を確認すること [1, 2]。

## 6 PDF ファイルの作成について

TexShop 等で PDF を作成した場合、使用する図や画像によってはファイルサイズが非常に大きくなる場合がある。例えば「Adobe Acrobat Pro」であれば、作成した PDF ファイルを「別名で保存」から「最適化された PDF」で保存し直すことで、ファイルサイズを小さくすることができる。解像度は少なくとも 300ppi は保つようにする。

また、Mac 付属のプレビューアプリでも、「書き出す」(「別名で保存」)で「Quartz フィルタ」の中の「Reduce File Size」を選択すればファイルサイズを小さくすることができる。ただし、デフォルト設定では出力される PDF ファイル中の画像の解像度が不足する可能性があるため、フィルタ設定を自作する必要があるかもしれない。ネット

表 1: 卒論卒制スケジュール

項目	締切日
レジューム提出	*月**日
卒業論文提出	*月**日
発表会	*月**日

で検索すれば, Quartz フィルタの作成方法はすぐに見つかる.

## 7 まとめ

レジュメは大量に印刷されて, 同級生だけでなく後輩も見ることになる. それを踏まえて, しっかりした原稿を作成して欲しい.

## 参考文献

- [1] 浦正広, 遠藤守, 山田雅之, 宮崎慎也, 岩崎公弥子, 毛利勝廣, 安田孝美, “天文教育に向けたスマートフォンの活用による対話型の星座検索モデルの提案”, 情報文化学会誌, Vol. 19, No. 2, pp.42–49, 2012.
- [2] 奥村晴彦, 黒木祐介, “改訂第 6 版 L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X2<sub>ε</sub> 美文書作成入門”, 技術評論社, 2013.